



仙台ダルク

<http://www6.ocn.ne.jp/~s-darc/>

薬物依存症者社会復帰中間施設

D A R C

仙台ダルクは1996年薬物依存症者の回復施設として開設されました。ダルクは日本で唯一の民間薬物依存症者回復施設として全国に20箇所あまりの施設を有し、薬物依存症者の自助グループNA(ナルコティックス・アノニマス)と連動して活動、運営しています。



業務案内



入寮案内



各種案内



お知らせ

2003年7月13日更新

006228

薬物依存リハビリテーション・センター

仙台ダルク

〒980-0011

仙台市青葉区上杉2-1-26

TEL 022-261-5341

FAX 022-261-5340



s-darc@jasmine.ocn.ne.jp

各種案内

仙台ダルクを支援する会

仙台ダルク家族会

女性ケアハウス

ダルク・ナイトケア・センター

ダルク・デイケア・センター

チェルキオ作業所・グループホーム

ダルクって何？

1985年6月、東京荒川区東日暮里で家賃13万円の木造2階建て住宅からDARCは出発しました。ドラッグのD、アディクション(依存症)のA、リハビリ - のR、センターのC、をとってダルクと命名されたのです。1人の薬物依存症者がアルコール依存症の自助グループにつながりながら崖っぷちに追い込まれ、無謀に立ち上げた日本で初めての薬物依存症者が集える場でした。以後15年、ダルクは全国に22ヶ所の関連施設を有する日本唯一の薬物依存症者回復施設に成長しました。依存症者は現在回復可能な病気として医学的にも認知されています。しかしその回復には、依存症者をありのままに受け止め、仲間同士で正直に自分を語り合う場が必要だとされています。ダルクの回復プログラムの中心は朝昼晩1日3回行なわれるこのグループミーティングです。

仙台ダルク

ダルクは薬物依存者の手助けをする事を目的とする日本で唯一の施設です。彼らは日本全国から集まって来ます。DARCにやって来る薬物依存者の大部分は覚醒剤、咳止めシロップ、鎮静剤、精神安定剤、睡眠薬、シンナーなどに依存しています。薬物依存からの回復には、薬物依存者本人からの正直な体験を聞くこと、自分も心を開き、正直に話をし続けること、仲間と一緒に薬なしの新しい生活を始めてみる必要があります。薬なしの新しい生活に慣れるまで約1年間くらいかかる事が分かってきました。回復には様々な障害が伴います。時にはハイになり、時にはダウンし、そのプロセスを何回も繰り返します。その状態を乗り切っていくには依存症者同士の出会う場がどうしても必要なのです。

ダルクはグループセラピーを行いながら、薬物依存から回復したいと望む仲間の集まる場所です。ダルクの目的は薬物をやめたい仲間の手助けをすることだけです。ダルクのプログラムの基本は、9ヶ月間、毎日グループ・ミーティングに参加することだけです。このプログラムを徹底的に実行することが薬物依存から回復できることを、多くの仲間が照明しています。ダルクに始めてきた人(ビギナーと呼ばれる)には、すぐに担当カウンセラーがつき、9ヶ月間継続して本人の個人的問題や、悩みについての相談を受けることが出来ます。その9ヶ月の間にビギナーは、NAグループの仲間の中にスポンサー(相談相手)を持つように指導されます。

事業目的

薬物依存者に、身体的、精神的、社会的援助を提供する事によって、薬物依存者からの回復を手助けし、将来自立できるように組み立てられた、薬物を使わない生き方のプログラムを提供する。

回復するための場、時間、回復している仲間のモデルを提供し、ナルコティクス・アノニマス(NA)の提案する12ステップに基づいたプログラムによって、新しい生き方の方向付けをし、各地の自助グループにつなげていく。

プログラム

- 1)どんな薬物依存者でも入る事が出来ます。(スタッフと相談が必要です。)
- 2)この家の責任者は、スタッフです。
- 3)薬物、暴力、セックスの問題があった時点で退寮になります。
- 4)自分の身体、部屋、ハウス全体を常に清潔に保ちます。
- 5)お金は、スタッフが管理します。
- 6)仕事を中心にしたプログラムが特徴です。
- 7)ミーティングは、毎日行ないます。
- 8)掃除、洗濯、食事の準備などは当番制です。
- 9)レクリエーション、スポーツ、キャンプなどのプログラムもあります。
- 10)楽しく過ごすこと、そして、楽しく生きること。

ケアの場所と時間

ダルクホーム 年中無休 午前9時～午後6時





依存症という病は関係の病と言われています。特に家族間の関係性が大きく依存症と関わっており、その関係性を変えていくことが本人や家族の回復にとって重要です。例えば依存症者本人が一時的に薬物を使わなくなったとしても、元の関係性に戻れば又使ってしまうということが往々にして起こります。

この関係性という視点から見れば、家族もまた回復すべき対象です。多くの家族は本人に対して薬を止めさせるためにあらゆる働きかけをしますが、ことごとく失敗します。最後には本人を殺すしかないと思うところまで追い詰められるほどです。

しかし薬を使うか使わないか、使うと思うか思わないかは本人の問題です。家族が使わせたくないと思っていることを他人がどうにも出来ないように、本人が使いたいと思っていることも誰にもコントロールできません。依存症の厄介なところはこのコントロールが本人にも出来ないことです。依存症者に家族や周りの人が出来ることは、ひとつだけです。それは本人にもコントロールできない病に侵されているということを依存症者が自覚できるような行動を具体的に実行することです。それには同じ苦悩を経験した家族から学ぶことが大きな力となります。是非ご参加ください。

ダルク関連書籍

「なぜ、わたしはたちはダルクにいるのか」
1991年刊 1500円

～ある民間薬物依存リハビリテーション・センター～

「漂流の果てに」
1998年刊 1800円
(茨城ダルク)

「薬物依存からの回復」
1998年刊 1500円
～その奇跡～ (横浜ダルク・ケア・センター)

「JUST FOR TODAY」
1998年刊 500円

購入お問合せは仙台ダルクまでどうぞ!